事業部連載企画 3

全農に密着

畜産生産部 × 全農グレイン

主な事業内容
- 飼料原料の安定調達
- 配合飼料の安定供給
- 家畜飼養の効率化に向けた新技術の普及など生産支援
- 日本への穀物の安定供給

牛や豚の飼養に欠かせない配合飼料。原料となる穀物の調達を巡る国際競争が激化する中、JA全農畜産生産部は子会社の全農グレイン（本社:米国ルイジアナ州）とともに、海外の穀物生産者から日本の畜産生産者まで一貫したサプライチェーンの強化と産地多元化に取り組んでいます。畜産生産部と全農グレインに飼料の安定調達についてお聞きしました。

飼料の安定調達で畜産経営を支える

米国で集荷した穀物を日本の畜産生産者へ

Q 全農グレインとは？

JA全農が米国で安定的に飼料原料穀物などを調達するため、1979年に設立しました。関連会社のCGBが米国内陸の中西部で集荷した穀物を、艀（貨物を運ぶ船）や貨車でルイジアナ州ニューオリンズ港にある全農グレインの輸出施設まで運搬。輸出エレベーターで貨物船に積み込み、日本を中心に世界中へ向けて輸出しています。

200人超の職員の多くが米国人の中、全農から出向している職員が、米国人スタッフと協力して穀物の安定調達、供給に努めています。

Q 安定調達に向けた取り組みは？

米国で集荷から行うにあたり、ライバルは世界の穀物メジャーです。近年の世界的な需要急増で獲得競争が激化する中、日本への安定供給のため、集荷力の強化と他国への輸出を含めた規模拡大によって競争力強化を図っています。

2018年に輸出エレベーターを従来の1・3倍、単一エレベーターとして世界最大規模の1800万㌧に増強しました。これは日本の飼料用とうもろこし年間輸入量の約1・5倍を輸出することが出来る規模になります。また、米国内での穀物集荷力強化のために、2021年には集荷施設26基を新たに取得し、拠点を120カ所超に増強しました。

全農グレインの穀物輸送船と輸出エレベーター

Q 具体的な業務内容は？

6万㌧の大型船を毎日1隻、出航させるイメージです。出航が遅れると、日本での飼料原料供給が途切れてしまう恐れがあるため、調整には細心の注意を払っています。穀物販売スタッフや輸出施設スタッフと毎朝会議をしながら、全農本所と情報を共有。日本国内在庫の状況に合わせて、船の順番や貨物の内容を調整するのが主な役割です。

さらに、CGBの集荷拠点から適切なタイミングで運搬できるよう調整したり、品質に問題がないか確認したりしています。ハリケーンなど天候によっては荷役ができなくなることもあり、天気予報や川の水位の確認も欠かせません。

世界中の国々にも輸出していますが、日本向けへの安定供給が最も重要です。今後も、日本向けの輸出を最優先に考え、引き続き安定供給ができるよう、現地スタッフとともに一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

全農グレイン
穀物部次長
（畜産生産部から出向）
佐々木 健司さん

2009年に入会し、2022年4月から現職。日本向けの穀物輸送船の出航に関する調整や内陸集荷業者との連携、穀物の品質管理などを担当。

日本の輸入量の2倍超を確保

JA全農は、飼料の安定調達に向け、産地の多元化にも取り組んでいます。

米国に加え、ブラジルやカナダでも、子会社や関連会社を設立し、集荷から輸出までの一貫体制を確立しています。年間輸出能力はブラジルが300万㌧、カナダでは昨年12月に稼働開始した輸出施設により200万㌧に達しました。

JA全農は今後も、畜産農家の皆さまに飼料原料を安定的にご提供できるよう、海外での穀物集荷体制の強化を通じ、サプライチェーンの維持・拡大に努めていく所存です。

次回は飼料畜産中央研究所、「鶏ふん低減飼料で農家負担軽減」7月20日（水）掲載予定（毎週水曜日掲載）